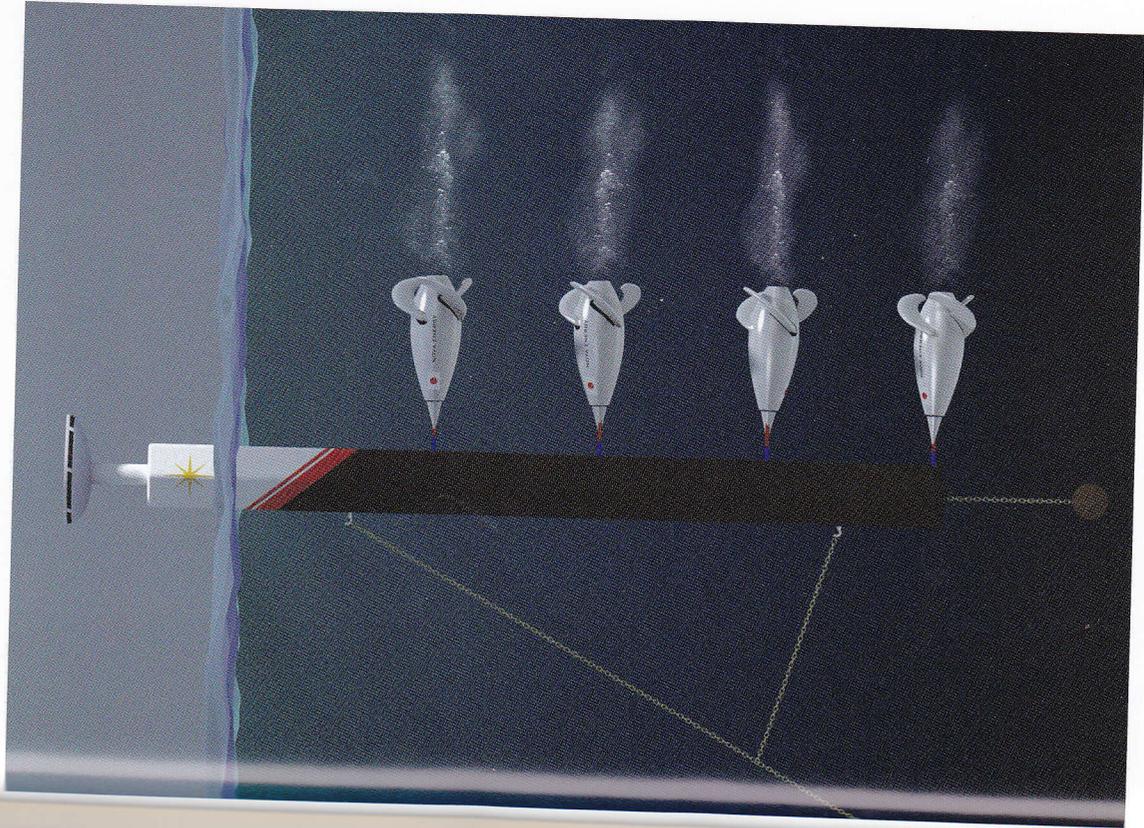


造や素材の見直しを迫られている。加えて、海流、潮流発電に対する国の理解はまだまだ浅い。開発を続けようにも金融機関からの融資さえままならない。立ち足る壁は途方もなく厚いが、それでも鈴木は海流、潮流発電がもたらす明るい未来を信じ、へこたれることはない。

鈴木をここまで打ち込ませる原動力は何なのか。その源流には、外航船の船長を10年務め世界の紛争と海の力を目の当たりにしてきた鈴木自身の体験がある。



120メートルの縦型ブイにつけられたタービンのイメージ図